

研究ノート

Text- und Gesprächslinguistik. (= *Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft* Bd. 16.1)

1. Halbband Textlinguistik. Hrsg. von K. Brinker/G. Antos/
W. Heinemann/S. F. Sager. Berlin/New York: W. de
Gruyter 2000.

——テキスト言語学の現在——

川 島 淳 夫

はじめに

ハルトマン及びワインリヒの「テキスト言語学」¹⁾(1969)、プリンカーの「テキスト言語学の課題と方法」²⁾(1971)など、テキスト言語学の誕生をマークする論文が現れてから30年が過ぎ、21世紀を迎えた今、『テキストと会話の言語学』(Text- und Gesprächslinguistik/Linguistics of Text and Conversation)が HSK Bd.16.1 として刊行されたことは時宜を得たものと言えよう。この HSK は Bd.16.1 が「テキスト言語学」(前編)で、Bd.16.2 は「会話の言語学」(後編)となる予定だ。前編・後編の目次が Bd.16.1 に出ている。それによると、前編は第 I 章(研究段階と諸アプローチ)、第 II 章(研究地域)、第 III 章(方法)、第 IV 章(テキスト構成 I: 諸前提)、第 V 章(テキスト構成 II: 文法の諸相)、第 VI 章(テキスト構成 III: テーマと実用論の諸相)、第 VII 章(テキスト構成 IV: テキストの産出、形成、受容)、第 VIII 章(テキストの類型論 I: 基準)、第 IX 章(テキストの類型論 II: コミュニケーションの領域とそれを構成する

テキストの種類)、第 X 章(テキスト言語学とその他の学問分野)、第 XI 章(応用領域)、後編は第 XII 章(研究段階と諸アプローチ)、XIII 章(研究地域)、第 XIV 章(方法 I: 調査方法)、第 XV 章(方法 II: 転写)、第 XVI 章(方法 III: 分析)、第 XVII 章(会話の構成 I: 諸前提)、第 XVIII 章(会話の構成 II: 構造)、第 XIX 章(会話の構成 III: 手順)、第 XX 章(会話の構成 IV: 様態表現)、第 XXI 章(会話の類型論 I: 基準)、第 XXII 章(会話の類型論 II: コミュニケーション領域とそれを構成する会話の類型)、第 XXIII 章(会話の類型論 III: 特殊形態)、第 XXIV 章(他の学問分野における会話分析)、第 XXV 章(応用領域)、第 XXVI 章(索引)となっている。

第 I 章では、テキスト言語学の歴史が詳述されている。古典ギリシアのレトリックから今日の記号論、文法論、言語学に至るまでの筋道が手際よく示されている。古代のレトリックの解説もかなり詳しく、例えば、言述 (Rede) の構成に関わる *inventio*, *dispositio*, *elocutio*, *memoria*, *pronuntiatio* (*actio*) について簡潔に述べられており、トポス研究についても触れるところがあり、今日のテキスト言語学の淵源をよく捉えている。執筆者はかつて 1983 年に「古代レトリックとテキスト言語学」³⁾ を書いたカルフェルケンパーである。

続いて、ザンダースの「テキスト言語学の先駆者: 文体論」があり、ハルヴェークの「構造主義言語学とテキスト分析」、エロムスの「プラハ学派のテキスト言語学への寄与」などが並んでいる。このほかに、「構造的物語テキスト分析」、「同位体概念」、「イギリスの脈絡主義」、「テキスト言語学における語用論的転回点」、「コミュニケーション志向・発話行為論的アプローチ」、「テキスト言語学における認知論的転回点」、「テキスト産出研究アプローチ」、「テキスト処理研究の諸相」などの論文がある。

第 II 章では、ドイツ語圏、英語圏、北欧、スラヴ語圏のテキスト言語学の研究状況が述べられている。第 III 章で方法論が論じられるが、この本の編者のひとりであるプリンカーは「テキスト構造分析」(164-175)と「テキスト機能分析」(175-186)を執筆している。第 IV 章以下興味ある論文が続出するが、目立つものを拾ってみると、「内容分析」、「論理・意味的分析」、「意味的・統

語的結束性」、「前方照応と直接指示」、「テーマ展開」、「語り、説明、論証」、「行為構造」、「間テキスト性」、「テキストの種類」、「テキスト言語学と記号学」、「テキストと図像」、「テキストとマスメディア」、「テキスト言語学と隣接科学」、「翻訳論、対照言語学、言語教育等にテキスト言語学が及ぼす影響」などがある。

ここでは、上記の「テキスト機能分析」について概略を述べ、最近のテキスト言語学の一面に光を当ててみたい。

「テキスト機能分析」の概略

グリーンカーは次の4項目についてテキスト機能を論じている。1) テキスト言語学の中での位置付け、2) テキスト機能の概念、3) テキスト機能を規定する方法、4) テキスト機能——テキスト構造——テキスト方略。

まず、テキスト機能分析は理論的・概念的な観点で見ると、1970年代の初期に起きた言語学上の語用論的転換以来テキスト言語学の学問的状況を規定してきたコミュニケーション理論ないしは行為理論を志向する研究に基づくものであるという事実が指摘される。テキストはいまや構造主義の意味での孤立した言語形成体ではなく、イギリスの言語哲学(オースティンなどの日常言語学派)から生まれた発話行為理論を背景に、具体的なコミュニケーションの場面に組み込まれ、一定のコミュニケーション機能を構成する複合的言語行為として規定される。そこで、次にテキスト機能の概念が説明される。テキスト機能に関する研究は、E. U. Große (1976)⁴⁾ から始まった。

グローセにあっては、テキスト機能は、「テキストの中にあって、一定の慣習的に妥当する手段で表現されたテキスト生産者のコミュニケーション意図」と定義される。テキスト機能はコミュニケーションの送り手の「真の意図」(隠された意図)とは同じではない。この真の意図がテキスト機能と一致することもあるが、かならずしも一致するとは限らない。グローセはテキスト機能には、情報伝達機能や訴求機能があるという。これらは発話行為理論でいうところの発話内行為に対応する。発話内行為が発話における行為的性格を決めるように、

テキスト機能はテキストのコミュニケーション・モードを規定する。グローセに倣って、プリンカーはテキスト機能を次のように分類する。すなわち、1) 情報伝達機能、2) 訴求機能、3) 義務拘束機能、4) 接触機能、5) 宣言機能である。このプリンカーによる分類は、サールの発話内行為の分類に基づいているが、訴求機能などはビューラーのオルガノンモデルによっているものである。情報伝達機能は新聞、雑誌、テレビなどの報道や研究報告や鑑定書、書評などに見られる。訴求機能は広告、宣伝文、処方箋、法律文書、請願書、申込書、説教などに見られる。義務拘束機能は契約書、協定書、保証書、誓約書、などに見られる。接触機能は日常の挨拶、挨拶状、絵葉書、恋文、別れの手紙などに見られる。宣言機能は辞令、遺言書、有罪判決、全権委任、証明書などに見られる。つぎに、具体的なテキストのテキスト機能はいかにして確認されるかが問題となる。

テキスト機能の規定は、文の発話内的行為を拠り所として行われる。テキストが単一の文だけからなる場合は、その文の発話内的行為がテキストの機能となる。しかし、多くの場合、テキストは結束性のある複数の文が集合したものであるから、文の数だけ発話内的行為を含んでいる。例えば、契約書というテキストでは、事柄の叙述が続き、最後に一種の約束事が述べられる。叙述＋叙述＋約束という簡単なテキストがあるとすると、このテキストは統計的には叙述が多いから、このテキストは「叙述」（情報伝達）という機能をもつと、グローセは考えたが、これに対してプリンカーは「約束」に至るための前段階として叙述があるのであって、「約束」のほうが優勢 (dominant) であるとし、優勢な発話行為のほうをそのテキストの機能と考える。このようにテキストの機能は優勢な発話内的行為によって規定されるのである。そこで問題は、いかなる観点に立っていくつかある発話内的行為のひとつを「優勢である」と判定するかということになる。プリンカーは、ひとつの例として広告のテキストの分析を示している。広告の中には、製品の完成を知らせる部分があり、これは情報伝達機能を果たすが、広告はそれだけでは意味がなく、製品の購入に結びつけないといけない。そこで、「この機会に〇〇を体感してください」といった

要求の発話内的行為を示す文章を入れる必要が出てくる。最近の広告では、郵便振替の番号ばかりではなく、「詳しくはホームページをご覧ください」といった「要求」の発話内的行為もみられる。ある言語表現がいかなる発話内的行為を含むかは、遂行文の存在や doch, nur, mal といった心態詞、話法詞などの存在、慣用化した疑問文 (Kannst du die Tür zumachen? ドアを閉めてくれないか) などの指標によって示すことができる。「要求」という発話内的行為は、「わたしはあなたに要求します」というか、「なにになにに下さい」という命令形を使うか、「何々してくれますか」のように疑問文を使うかなどの方法で表される。プリンカーはこれらの言語手段をテキスト機能の指標 (Indikatoren der Textfunktion) と呼んでいる。このほか、テキスト機能の解釈にとって重要な役割を果たすものとして、コンテキストが挙げられる。さらに、テキストの理解にとって、重要な役割を果たすものには、コンテキストと並んでテキストの構造をあげることができる。

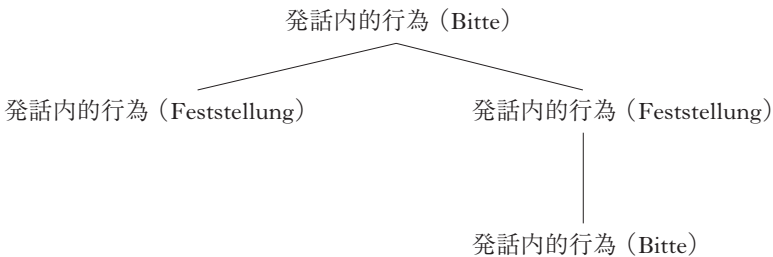
言語学的テキスト分析で重要なのは、機能と構造を区別することである。しかし、この両者が孤立しているという意味ではない。むしろ両者は緊密な関係にあり、その関係を記述するのがテキスト言語学の課題である。そこで、上に見たテキストの機能と並んでテキストの構造(特にテーマ的構造)がいかなる関係にあるかを検討することが必要となる。

一般的にいえることは、テキスト機能はテキスト構造(つまり文法的・テーマ的観点から見たテキストの形成)を規則的に規定するということである。ただし、その条件についてはあまり詳しく研究がなされていないので、規則を挙げるまでに至っていない。テキストの構造は、文法的レベル、テーマ的レベル、語用論的レベルで考察される。テキストの概念規定はこれまでにいろいろな立場でなされているが、今日的なテキスト概念はオースチンとサールの発話行為理論を背景にして形成されているものが多く、複合的な言語行為と定義される。文法的レベルでは、文と文のつながり(結束性)が問題となる。テーマ的レベルでは、文のテーマとテキストのテーマが区別され、テキストのテーマの展開の仕方が問われる。テーマ的テキスト構造の分析は、テキスト内で文の中に表現

されたもろもろの事柄(諸命題)の間につくられる意味的・認知的関連性にかかわり、この関連性は「テーマ的世界像」を指示するものとされる(Fritz 1982)⁵⁾。テーマ構造については、ファン・ダイクのマクロ構造分析⁶⁾とダネシュのテーマ展開に関する分析⁷⁾がある。語用論的レベルでは、テキストは単に文の結束的集合ではなく、話し手・書き手が聞き手・読み手に対して一定のコミュニケーション関係を作り出そうとする、複合的言語行為として捉えられる⁷⁾。例えば、次のドイツ語の4つの文から成る一人物の発言で、

- (1) Du bist sehr erkältet. (あんたはひどい風邪をひいているわね)
- (2) Geh doch bitte zum Arzt. (お医者様のところへ行ってらっしゃい)
- (3) Er hat seine Praxis ganz in der Nähe. (この近くに診療所があるわ)
- (4) Kennst du sie? (そこ知っている?)

(1)は確認(Feststellung), (2)はお願い(Bitte)、(3)は確認(Feststellung)、(4)は質問(Frage)を表している。そのうち、(2)がもっとも優勢であるから、この発言全体の発話内的行為は、お願い(Bitte)ということになる。このテキストの発話内的行為は、次のような階層をなしていると言われる。



このようなテキスト分析にはいろいろな批判的質問が出されているが、テキストを構成する文は、テキストのテーマ構造に関してみると、テキスト内的な機能を果たしているという点は認められる。これに対して、どのような順序で文を配列すると、より効果的な(あるいは説得的な)発言となるかを問題とする立場がある。それは、テキストの方略(戦略)をめぐるテキスト構造の議論であ

る。

テキストの方略とは、要するにテキスト内での文の配列をどうするか、というテキスト形成上の策略である。一般に方略 (Strategie) とは、最善の形で意図ないしは目的を実現する計画をいう⁸⁾。テキスト機能との関連では、テキスト方略 (Textstrategie) といわれる。

テキスト方略は、テキスト機能と著者の意図とが一致する場合は、著者方略と符合する。あるいは、テキスト機能と著者の意図が一致しない場合は、著者方略と区別される。テキスト方略は具体的に言えば、テキストの構成要素と部分構造をテーマ的、文法的、語彙的観点から選択し、配列し、言語・文体的に形成する選択原理 (Selektionsprinzip) である。しかもテキスト機能が一定のコミュニケーション場面において、最善の形で (optimal) すなわち(受容者との関連で)出来る限り効果的に示されるようにする。具体的なテキスト方略は、ある程度まで慣習化された(テキストの種類に特有の)処理方法に基づいており、これはまたテキスト方略のパターンとして言語使用者のテキスト形成能力に属する。テキスト方略の重要な点は、間接的な方法を用いて実際のテキスト機能をいっそう効果的に表すことにある。広告のテキストには、情報伝達機能と訴求機能があるが、このようなテキスト機能をどうすればより効果的になるかを考える方策が、テキスト方略である。テキスト方略は、従って、表現されたテキスト機能(情報伝達機能)と実際のテキスト機能(訴求機能: 受容者にアピールする機能)との間に対立を打ち立てることにある。この対立は受容者が広告の内容を知ることによって解消される。

全体としてみると、テキスト言語学的基本範疇である「テキスト機能」と「テキスト構造」に、さらなる範疇「テキスト方略」を付け加えることは有意義であると思われる。テキスト方略は、テキスト機能が最善の形で実現される場合に、「構造」と「機能」の関連をしっかりと把握することを可能にしてくれるからである。従って、テキスト方略の記述はテキストの構造分析とコミュニケーション機能的分析の橋渡しとなるわけである。

以上がブリンカーのテキスト機能論の概略である。このほかに、テキスト

の分析は、テキストの種類によってはさまざまな分析が可能になる。実際、文学テキストの分析や学術テキストの分析などに見られるように、多くのテキスト分析が試みられている⁹⁾。例えば、構造的な分析、機能的な分析、統計的な分析、テーマ的な分析、語用論的な分析、意味論的な分析、会話・対話分析、対照的な分析、認知言語学的な分析などがある。HSK の Bd.16.1 は、まさにこれらの分野におけるテキスト言語学の現在を示すものである。

注

- 1) Hartmann, P. (1968): Textlinguistik als neue linguistische Teildisziplin. In: Replik 2, S. 2–7. Weinrich, H. (1969): Textlinguistik. Zur Syntax des Artikels in der deutschen Sprache. In: Jahrbuch für Internationale Germanistik 1, S. 61–74.
- 2) Brinker, K. (1971): Aufgaben und Methoden der Textlinguistik. Kritischer Überblick über den Forschungsstand einer neuen linguistischen Teildisziplin. In: Wirkendes Wort 21, S. 217–237.
- 3) Kalverkämper, H. (1983): Antike Rhetorik und Textlinguistik. Die Wissenschaften vom Text in altherwürdiger Modernität. In: Faust, M./Harweg, R./Lehfeldt, W./Wienold, G. (eds.): Allgemeine Sprachwissenschaft, Sprachtypologie und Textlinguistik. Tübingen: G. Narr 349–372.
- 4) Große, Ernst Ulrich (1976): Text und Kommunikation. Eine linguistische Einführung in die Funktionen der Texte. Stuttgart: Kohlhammer.
- 5) Dijk, Teun A. van (1980): Textwissenschaft. Eine interdisziplinäre Einführung. Tübingen: Niemeyer.
- 6) Daneš, František (1970): Zur linguistische Analyse der Textstruktur. In: Folia Linguistica 4, 72–78.
- 7) Motsch, Wolfgang (1986): Anforderungen an eine handlungsorientierte Textanalyse. In: Zeitschrift für Germanistik 7, 261–282.
- 8) Enqvist, Nils Erik (1987): A Note Towards the Definition of Text Strategy. In: Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung 40, 19–27.
- 9) Adamzik, Kirsten (2001): Kontrastive Textologie: Untersuchungen zur deutschen und französischen Sprach- und Literaturwissenschaft. Tübingen: Stauffenburg.